遺跡出土木材から知る日本人と樹木とのつながり

木材研究部門　木材加工・特性研究領域　チーム長　**能城 修一**

写真１　現在のウルシ畑（岩手県二戸市浄法寺町）

遺跡から出土する木材の樹種を調べていると、史料には記述されていない日本人と樹木との古いつながりが見えてきます。

ウルシから採取する漆液は漆器を製作するうえで不可欠な材料です（写真1、2）。ウルシは中国原産の樹木ですが、日本では約７０００年前にはじまる縄文時代前期から多数の漆器が出土するようになり、この頃か、やや少し前に中国からウルシの木と漆液利用の技術がもたらされたと考えられています。縄文時代に漆器があることは１００年ほど前から知られていましたが、縄文時代のウルシの木の栽培状況が分かったのは今世紀に入ってからです。遺跡出土の木材や花粉でウルシを識別できるようになった結果、縄文時代の主要な集落の周辺には普通にウルシが植栽され、そこで漆液を掻いて漆器を製作していたことが分かりました。その後、遺跡出土木材の太さや年輪の解析から、縄文時代の人々はウルシの資源を管理して、漆液を漆器製作に使うだけでなく木材も土木用材とするなど、

写真３　唐古・鍵遺跡（奈良県磯城群田原本町）第1次調査で見いだされた弥生時代前期のイチイガシ製平鍬
京都大学総合博物館(英名:The Kyoto University Museum)所蔵

写真２　辺掻きによってウルシの幹につけられた漆液の掻き跡（岩手県二戸市浄法寺町）

高度に活用していたことが分かってきました。

さて、その後の弥生時代には稲作が導入され、生活の様式が大きく変化します。弥生時代から古墳時代の農耕の重要な道具として、遺跡からは木製の鋤と鍬が多数出土します（写真３）。従来、鋤鍬の材料はカシの仲間とされてきましたが、最近の研究でカシのなかでもイチイガシがもっぱら使われていることが分かりました。イチイガシの木材は、カシとしては比較的軽く弾力性があり、最近まで和船の櫓（ろ）などに重用されてきました。

イチイガシは、縄文時代前期頃には近畿地方に広がった照葉樹林を構成していたにもかかわらず、その後、九州を除いてほとんど自然状態のものは消滅したことが知られています。現在では、近畿地方や、中国地方、四国地方などの神社の社叢（しゃそう）に点々と分布しているだけです（写真４）。なぜ、かつて森林の主要な構成要素であった樹種がそこまで衰退したのかは分かっていません。またイチイガシは各地で神木とされていますが、その由来もまだ分かっていません。

このように、遺跡出土木材は日本人と樹木との深い繋がりについての手がかりを与えてくれます。

写真４　宇佐神宮のイチイガシの大木（大分県宇佐市）